

イギリス高等教育におけるチュートリアルの伝播と変容

竹 腰 千 絵

1. はじめに

日本の高等教育が今日抱えている問題の一つに、教員文化と学生文化との乖離が挙げられる。研究中心の教員文化に対して、学生文化においては学習意欲の欠如がみられ、大学で何を勉強したいのかわからない学生が急増している。この現状には、従来の一斉授業では対応できなくなってきたおり、教員集団の教育力であるFDを高めることと同時に、それ相応の教育環境が求められている。この教育環境として大いに参考になると考えられるのが、イギリス高等教育に見られるチュートリアル (tutorial) という少人数教育である。

伝統的な教授形態として、今日においても重んじられている様々なチュートリアルが、時代を通してどのように形成されてきたかを明らかにし、日本の高等教育が今日抱えている問題に対して示唆を得ることが、本論文の目的である。

チュートリアルとは、チューター (tutor) と学生 (pupil) が1対1～4の割合で行われる個人指導のことで、学生が書いてきたエッセイに対し、チューターが批評を行い、その後チューターと学生の間で議論が行われる。

チュートリアルは13世紀のオックスフォード・ケンブリッジ両大学¹ (以下、オックス・ブリッジ) で発生した歴史あるものである。その内容は、優等学位の導入などのオックス・ブリッジ内部における制度改革によって変容し、さらに、オックス・ブリッジから他大学への伝播によって、時代ごとに大きな変化を遂げてきた。学生の興味・関心を深め、その知的・精神的成長を促す、イギリス高等教育を特徴づける教授形態である現在のチュートリアルは、このような歴史的な変遷を経た結果生まれたものなのである。

チュートリアルに関する先行研究についてはまず、安原が「イギリスの大学における学士学位の構造と内容」² において、オックスフォード大学におけるチュートリアルとチューターの役割や、優等学位試験について言及している。Sandersonは *The Universities in the nineteenth century* ³ において、優等学位の導入により実質的な教育が大学外のプライベート・チューターによって行われるようになったことなどを指摘している。オックス・ブリッジ以外の大学が設立された際、オックス・ブリッジのチュートリアルに対する他大学の考え方について考察した研究としては、以下のものがある。Perkinは *New universities in the United Kingdom* ⁴ において、ロビンズ報告やヘイル報告を参考にしながら、ロンドン大学、市民大学、新大学について、その設立や理念について考察している。ロンドン大学については、Aldrichが *Education for the nation* ⁵ において、大学設立の背景や、学外学位試験制度などについて考察している。また、Negleyは *The University of London 1836-1986* ⁶ において、ロンドン大学設立当初の事情や、

教育機関として再編成されていく様子を描いている。市民大学については、Jonesが *The Origins of Civic Universities* ⁷において、その設立の目的や、スコットランドの大学における講義を模倣したことなどについて言及している。Armytageは *Civic Universities* ⁸において市民大学が大学憲章を授与されたことでロンドン大学のカリキュラムから解放されたことや、市民大学の学生がチュートリアル増加を求めたことなどが述べられている。また、イギリスの大学における教授形態については、政府の諮問機関などにより詳細な調査が行われ、その報告書が出されており、チュートリアルとセミナーの違いなどについても述べられている。その中で、チュートリアルとは、学生主体（student-centred）の教授形態であり、1～4人の学生に対して行われることが述べられている。

このように、先行研究においてはチュートリアルが発生した背景や、オックス・ブリッジのチュートリアル⁹が他大学の設立の際に参考あるいは比較対象とされていたことなどについての考察はされている。しかし特にチュートリアルの歴史的変遷に焦点を当て、オックス・ブリッジにおけるチュートリアルの変遷だけでなく、オックス・ブリッジからそれ以外の大学へチュートリアルがどのように伝播したのか、そしてその後どのように変容していったのかについての系統立てた分析が不十分であった。また、チュートリアルを形成する要素についても、「学生主体」や「少人数教育」という形態的な特徴については先行研究において指摘されているものの、機能的な特徴にまで言及されることは少なかった。それはチュートリアルがプライベートな空間で行われる教授形態であるため、その内部を垣間見ることは困難であったためである。しかしインタビュー調査や自身の経験などから、機能的な特徴こそがチュートリアルを形成する重要な要素であると考えたため、本研究ではそれらの要素についても考察する。

そこで本論文では、チュートリアルの伝播に注目し、その変遷過程について歴史的アプローチにより明らかにする。まず、オックス・ブリッジにおけるチュートリアルの歴史的変遷をみることで、チュートリアルを形成する要素を導き出す。そしてそれらの要素のうち、19世紀以降に設立されたイギリスの大学に継承されたものと、継承されなかったもの、さらには伝播の過程で変容したものを明らかにし、その背景を探る。なお本論文ではイギリス¹⁰の大学を「オックス・ブリッジ」「ロンドン大学」「市民大学」「新大学」の4つのカテゴリーに分けて考察する¹¹。

本論文の構成は以下の通りである。第2章では、オックス・ブリッジにおけるチュートリアルの歴史的変遷について考察する。第3章と第4章では、オックス・ブリッジのチュートリアルがイギリスの他大学にどのように伝播していったのか、その形態を明らかにする。特に、スコットランドの教授形態から大きな影響を受けたロンドン大学・市民大学におけるチュートリアルと、オックス・ブリッジの教授形態から大きな影響を受けた新大学のチュートリアルを比較する。そうすることで、オックス・ブリッジのチュートリアルから両者が共通に受け継いだ要素と、一方だけが受け継いだ要素を導き出し、伝播変容の過程を経ても変わらず受け継がれてきた要素について明らかにする。

2. オックス・ブリッジにおけるチュートリアルの歴史的変遷

2-1. カレッジにおけるチューターの役割

オックス・ブリッジの主な特徴として挙げられるのはカレッジ制である。オックス・ブリッジ

は、中世に主にイギリス国教会（the Church of England, 以下、国教会）の聖職者養成機関として誕生し¹²、19世紀半ばまで、国教会牧師の子弟や、裕福な家庭の子弟を対象に教育を行っていた。オックス・ブリッジには大学全体としての全学（University）という組織があったが、13世紀のカレッジ創設以後、学生とチューターはカレッジにおいて共同生活をし、学問研究と教育を行うようになり、カレッジ制が両大学の基本的性格となっていった。

このカレッジ制とともに、教員と学生の間に学問的・人格的に緊密な関係が築かれる大きな要素となったのがチュートリアルである。オックス・ブリッジには伝統的に、カレッジのフェローがチューターとして学生の学問的・道徳的指導を行う習慣が、非公式な形で存在した。

優等学位試験（次節参照）の導入により、19世紀前半には、チューターの役割が一度学問的指導に傾いた。1810年代、スコットランドの大学人達はオックスフォード大学批判をし、1830年代～1840年代には、オックスフォード大学の内部からオックスフォード運動 が起こった。この運動では、カレッジのチューターが学生に対する道徳的・精神的指導への関心を欠いている点が指摘され、その結果、学問的指導に偏っていたチューターの、道徳的・精神的指導という役割が見直されるようになった¹³。このように、チューターには学生の学問的指導以外に、道徳的指導を行う「道徳的チューター」（moral tutor）としての役割もある。今日でも多くのカレッジにおいて、チューターには、学問的指導と道徳的指導の役割が兼ね備えられている¹⁴。

2-2. 優等学位の導入によるプライベート・チューターの発生

18世紀半ばから19世紀初頭にかけて、オックス・ブリッジの学位試験を公正で厳格なものにし、学生の学習意欲を高めるために、新たに優等学位（honours degree）が導入され、優等学位試験が設けられた。

優等学位の導入により、学生側からは高水準の教育が要求されるようになった。しかし当時の、チューターによる、能力の多様な学生に対しての少人数教育では、高度な専門性が求められる優等学位試験に十分に対応できなかった。そこで1830年前後から現れ始めたのが、オックス・ブリッジの大学外で学生に専門的な教育を行うプライベート・チューターであった。このように、優等学位の導入により、主要な教育が正規の教育の外で行われるという特異な事態が生み出されたのである。このプライベート・チューターによる個人指導においてはじめて、チューターと学生の1対1の、学問を通した人格的な接触が可能となった¹⁵。

2-3. カテキズムの少人数教育からソクラテスのチュートリアルへ

19世紀初頭には、チューターの部屋でカテキズム的（catechetical）少人数教育が行われていた。そこではチューターが学生に、テキストの内容を覚えていないか確認するための質問をしたが¹⁶、学生はチューターに対して質問をしたり説明を求めたりすることができなかった。カテキズムの少人数教育はテキストの正確な知識を教え込むのに適しており、教授と学習の自由を抑制する意図があった¹⁷。このように優等学位導入当初チューターが目指したことは、学生に一定量の知識を習得させ、できるだけよい成績で優等学位試験に合格させることであり、議論を通して学生の理解を深めることではなかったのである¹⁸。

1870年以降カテキズムの少人数教育は、チューターの質問に答えることにより、学生が深く考

えさせられ論理性を鍛えることが試みられる、ソクラテスのチュートリアルへと変容していく¹⁹。この変容の背景には、1850年前後におけるオックス・ブリッジへの科学科目の導入があった。この導入は「大学が、研究を教育と並ぶ主要な機能として受け入れる」ことを意味し、「今まで真理であったことに対して疑問を投げかけ、探究する」ということである。学生や教員には「新たな知識の創造」や「独創的思考」が求められるようになった²⁰。そしてそのためには、ソクラテスのチュートリアルが必要であったと考えられる。さらなる背景として、1850年代～1860年代、プライベート・チューターによる1対1の個人指導の形態が、オックス・ブリッジのチューターによって、正規の教育の中へ取り込まれたという事実があった²¹。

このように19世紀後半には、チューターが学生に1対1で指導をするという形態がオックス・ブリッジの特徴となり、両大学の教育の根幹となっていた。チューターと学生の間では自由な議論が行われるが、チューターから出される質問は、あらかじめ答えが決められたものではない。チューターは学生を一つの答えに導くのではなく、学生がエッセイにおいて出した結論の可能性を議論し、より深く考えさせ、場合によっては修正させることを試みるという²²、ソクラテスの問答法²³を使うようになった。学生は自分の理解が不十分なところをチューターと議論できるようになり、チューターも学生の理解度をより正確に把握できるようになった²⁴。学生の理解促進には効果的でなかったカテキズムの問答法は衰退し、教授内容も決まったテキストからテーマ性のあるものへと移行した。

以上、本章で導き出したチュートリアルの機能的な特徴を、先行研究で挙げられている形態的な特徴と合わせて考えると、チュートリアルを形成する重要な要素として以下の4つを挙げることができる。すなわち、①少人数制、②学生主体、③ソクラテスの要素が含まれていること、④チューターに学問的指導と道徳的指導が兼ね備えられていること、である。本論文ではこの4つの要素をもつものを、チュートリアルの原型と捉えることとし、こうしたチュートリアルの原型が、19世紀以降どのようにイギリスの他大学に伝播し変容していったのか、その過程について次章以降で明らかにしていくこととする。

3. ロンドン大学・市民大学へのチュートリアルの伝播と変容

オックス・ブリッジで形成されたチュートリアルの原型は、19世紀以降他の大学へと伝播していくことになるが、その伝播形態は、ロンドン大学・市民大学への伝播と、新大学への伝播の大きく2つに分けられる。本章ではロンドン大学・市民大学への伝播について考察する。

3-1. オックス・ブリッジからロンドン大学へ

3-1-1. ロンドン大学の設立と理念

14世紀から19世紀初頭まで、スコットランドを除いて、オックス・ブリッジ以外の大学を設立することは王権によって禁圧されていた。1760年代からの産業革命により、中産階級が次第に実質的な支配階層となっていた。彼らは科学・技術を重視したため、オックス・ブリッジ以外に学位授与権を持つ機関を設立しようとする強い動きが出てきた²⁵。

1826年、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（University College, London）が世俗的な

機関として創設された。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの設立当初の目的は、①オックス・ブリッジに受け入れられない学生に高等教育を提供すること、②オックス・ブリッジで軽視されている科目を提供することであった²⁶。①については当時、オックスフォード大学においては非国教徒の入学が認められておらず、ケンブリッジ大学においても学位試験の際、国教会への誓いが義務づけられていたからである²⁷。②については当時、オックス・ブリッジで学べる科目の幅が狭かったからである。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンは、科目の幅広さ、講義中心の教授形態、通学制、宗教審査の廃止など、スコットランドの大学からその特徴の多くを取り入れた²⁸。

1829年、世俗的な教育機関であるユニバーシティ・カレッジ・ロンドンに対抗して、国教会が後盾となりキングス・カレッジ・ロンドン（King's College, London）が創設された。両カレッジは類似したカリキュラムをもつことになったため、両者を統合する協議が行われ、1836年、教育と学位授与を行う1つの大学としてロンドン大学（University of London）が誕生した。しかし全学は実質的には独立した試験機関であった。学位試験は、両カレッジの学生だけでなく、政府が認可したロンドン大学の提携カレッジで学んだ学生も受けることができ²⁹、それらの学生には学外学位（external degrees）が授与された。

3-1-2. 教育機関としての新生ロンドン大学へ

全学は教育を行わなかったし、教育機関であるカレッジと緊密なつながりを求めることもなかった³⁰。これに対して、ロンドン大学がより進んだ教育を促進し、独創的な研究のための機関となるべきであるという声がカレッジ内部から高まった³¹。

1898年、ロンドン大学法の制定により、大学は教育機関として大きく再編成されていった。全学的な組織としての大学は、その組織の中心を成す学部や委員会を通して、カレッジのコースの内容や学問的な質を監督するようになった³²。つまり、教育組織であるカレッジと学位授与のための試験機関である全学との間に実質的な結びつきができたのである。

3-1-3. ロンドン大学へのチュートリアル の 伝 播

1898年の大学の再編成は、学生数や教授形態などにかなり大きな影響を与えた。学生には講義への出席が義務づけられるようになった。同年、文学部が現代語を拡充するにあたりドイツ語科が創設され、その際セミナーが導入された³⁴。

このようにロンドン大学が教育機関として再編成されていく中で、チュートリアルも着実に導入されていった。1928年に出版されたユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのカレンダーには、「1908年頃には、カレッジの教育の大部分が講義によって行われていた。しかし1928年頃になると徐々に、講義が教育の一部を担う一方で、セミナーや議論やチュートリアルなどが、講義を補う重要なものとして、そしてさらには置き換わるものとして発展してきた」という記述がある³⁵。こうしたチュートリアル導入の流れをキングス・カレッジのカレンダーから調べてみると、確かにこの期間、特に1920年に入ってから顕著にチュートリアルやセミナーなどの少人数教育が導入されていることがわかる（表1）。また、チュートリアルは文学部、医学部へは早い段階から導入されており、工学部への導入が一番遅いことが分かる。これはチュートリアルが、講義によ

て知識を詰め込み、演習によって実践を行うという実学系の学問よりも、考えを深めていく学問や、人との接触を職業の中心的なものとする学問に適した教授形態だからである。また、実学系の学問では、お金と時間のかかるチュートリアルという教授形態に十分な費用対効果が望めなかったことも、工学部へのチュートリアルの伝播の時期が遅かった理由であると考えられる。

表1. キングス・カレッジ・ロンドンにおけるチュートリアルの導入状況

(T=Tutorial, S=Seminar C=Catechetical Class)

学科／年度		1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928
文学部	教育				T	T	T	T	S	T	T
	国文							T	T	T	T
	国文（夜間）	T		T	T	T	T	T	T	T	T
	フランス						T	T	T	T	T
	中世/近代史		T	T	T	T	T	T	T	T	T
	哲学					S	S	S	S	S	S
	スペイン			S	S	S/T	T	T	T	T	T
	心理										S
	心理（夜間）				S	S	S	S	S	S	
法学部	ローマ法	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S
	ローマ/オランダ法	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S
医学部	生理学/生化学/ 有機化学/組織学	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
	薬学/治療学			C	C	C	C	C	C	C	C
	実験薬学				C	C	C	C	C	C	C
工学部	土木/ 機械工学									T	T
神学部	旧約聖書/ ヘブライ語		S	S	S	S	S	S	S	S	S
	教会学	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S
	宗教哲学	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S
	宗教文学	S	S	S	S	S	S	S		S	S

出所：キングス・カレッジのカレンダー1919-20～1928-29をもとに筆者作成。

注）神学部は全学生に、コース等について助言をするチューターがつく。

このように、ロンドン大学へのチュートリアルの伝播は、ロンドン大学が学位授与機関から教育機関へと再編成される中で起こった出来事であった。このためチュートリアルは一斉に導入さ

れたわけではなく、教員によってはカテキズムの少人数教育を維持したり、セミナーを用いたり
と、少人数教育に対する教員の考え方が反映されており、ばらつきがみられるという特徴がある。

3-2. オックス・ブリッジから市民大学へ

3-2-1. 市民大学の設立と理念

1760年代からイギリス各地で産業革命が起こり、人々は都市に集中するようになった。そのため特に人口が膨れ上がった都市部において、教育の需要が高まった。また、1867年に開催されたパリ万博で、イギリスの科学技術がヨーロッパ大陸の他国に遅れをとっていることが決定的なものとなった³⁶。このように、技術的な訓練を受けた人材養成の需要の高まりにより、都市に市民大学³⁷ (Civic Universities)の母体となったカレッジ³⁸ (University College)が急速に現れ始めた。これらのカレッジは設立当初、学位授与権を持たなかったため、ロンドン大学のシラバスに従って授業を行い、学生には提携校であるロンドン大学の学外学位取得を目指させた。これらのカレッジはロンドン大学と同様に、スコットランドの大学に倣い、講義を主要な教授形態とし、学部・学科制、通学制を採った³⁹。

3-2-2. 市民大学へのチュートリアル の 伝 播

1898年にロンドン大学が教育機関として再編成された後、各カレッジには相次いで大学憲章が授与され、市民大学となっていった。市民大学は、大学憲章の授与により初めて独自のカリキュラムを組むことが可能となった。これに伴って教授形態にも大きな変化が見られるようになり、こうした流れの中でチュートリアルは導入されていった。その背景には、オックス・ブリッジから市民大学への教員の移動により、講義を補うものとしてチュートリアルが採り入れられていったということがあった。ここでは代表的な市民大学の1つとしてシェフィールド大学の例を取り上げる。同大学は1905年に大学憲章を授与されたが、直後の1906年から1916年までの10年間にチュートリアルが盛んに導入されていったことが分かる(表2)。またその導入は医学部、科学部で早く、文学部にも徐々に導入され、ロンドン大学と同様に工学部への導入が一番遅かった。これはロンドン大学と同様に、市民大学においてもチュートリアルという教授形態が、講義と演習が主な教授形態である工学という学問になかなか馴染まなかったからであると考えられる。チュートリアルの導入時期は、ロンドン大学よりも市民大学の方が早い。これは、教育機関として再編されたことで全学とカレッジが徐々に歩み寄り、チュートリアルを緩やかに導入したというロンドン大学に対して、市民大学では大学憲章が授与され、学位授与権を持つ教育機関になったことで、独自性が早くから確立され、比較的柔軟な教授形態を採ることができたからだと考えられる。

表2. シェフィールド大学におけるチュートリアルの導入状況

(T=Tutorial)

学科／年度		1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915
文学部	歴史					T	T	T	T	T	T
	経済								T	T	T
法学部	イギリス法								T	T	T

医学部	解剖	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
自然科学部	物理					T	T	T	T	T	T
	化学	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
応用科学部	工学									T	T
	機械/電気工学									T	T
	土木工学									T	T

出所：シェフィールド大学のカレンダー1906-07～1915-16をもとに筆者作成。

その後チュートリアル増加を求める声が、大蔵大臣の諮問機関であるUGC（University Grants Committee）や学生から大きかったが、結局財政的な事情により学生の満足のいく量のチュートリアルが行われることはなかった。

一方で、チューターの果たしていた役割についてであるが、市民大学のチューターは学問的指導に終始しており、オックス・ブリッジのようにチューターが「学問的指導＋道徳的指導」を行うという概念がない。また道徳的指導を行うための「道徳的チューター」を別に設けるということもしていない。

以上のように、チュートリアルの伝播そのものは、ロンドン大学でも市民大学でも、試験機関から教育機関への再編もしくは大学憲章の授与といった、外的要因によって教授形態の見直しやカリキュラムの再編成の必要性に迫られたことが直接の契機となっていたことが分かる。しかし両大学は、ともに元来スコットランドの大学を模倣し、講義を中心的な教授形態としており、また実学系の学問に重点を置いていたため、費用と時間のかかるチュートリアルという教授形態に十分な費用対効果が望めず、さらに比較的歴史が浅く十分な財政基盤を持たない両大学においてはチュートリアルを実施する財政的余裕がなかった。このような現実的な理由により⁴⁰、学生からのチュートリアル増加の要望の高まりやUGCからの圧力があっても関わらず、ついにチュートリアルはこれらの大学における中心的な教授形態とはなりえなかったのであった。

また、ロンドン大学や市民大学においてはチュートリアルが導入されたものの、チューターの役割は学問的指導に限定されるものであった。その理由としては、通学制を採用している両大学では、学生の大学での滞在時間が短いため、チューターが道徳的指導を行うことは難しいことが挙げられる。これらのことから、オックス・ブリッジで形成されたチュートリアルの原型は、ロンドン大学・市民大学への伝播において、カレッジ制を採らず通学制を採ったという学校制度上の違い、および財政的理由によって、量的にも機能的にも限定された形に変容したということができる。

そこで次章では、これら両大学とは異なり、オックス・ブリッジのチュートリアルをより忠実に受容し、教授形態の中心に位置づけた新大学におけるチュートリアルの伝播過程に焦点を当て考察する。

4. 新大学へのチュートリアルの伝播と変容

4-1. オックス・ブリッジから新大学へー新大学の設立と理念ー

1960年代～1970年代にかけて、①現代の科学・技術の進歩に遅れをとらない新しいカリキュラムと教育方法の実験を行い、②予想される大学進学者の増加に対応するために設立された一連の大学を新大学⁴¹ (New Universities)という。

新大学の特徴は、①設立当初から政府により財源が提供され学位授与権を有していたこと、②柔軟で幅広いカリキュラムを提供するスクール制を採用したこと、③学内における共同生活の教育的意義を高く評価しカレッジ制が採られたこと、である⁴²。中でもスクール制とカレッジ制は、当時ロンドン大学や市民大学において問題となっていた学科主義と教員・学生間の接触の乏しさに対して、新大学が行った新しい試みであった。

スクール制を採用した新大学は、幅広いカリキュラムを提供した一方でカレッジ制を受け入れなかったため、カレッジのチューターによる「学問的指導＋道徳的指導」を行うことができなかった。しかし学問的チューターとは別に道徳的チューターを設定し、オックス・ブリッジのチューターの機能を分化させることで対応している。

一方でカレッジ制を採用した新大学は、学科主義的になっていったが、その弊害を減少させるための工夫がされている⁴³。1年次には関連科目を選択できる幅広いコースが用意され、2、3年次には主専攻と副専攻を様々な組み合わせによって学ぶことができるのである。

このように新大学は、ロンドン大学・市民大学の実践に対して新しい挑戦を行ったが、スクール制を採った新大学もカレッジ制を採った新大学も、ロンドン大学・市民大学の特徴を取り入れざるをえなかったと考えられる。しかしその際カレッジ制を採った新大学においては学科主義に陥らないような工夫がされており、一方で、スクール制を採った新大学では、カレッジ制を採らないことによる弊害を減らす努力がなされている。

4-2. 新大学へのチュートリアルの伝播

新大学設立当時イギリスでは、学生の増加により教員が学生に十分なサポートができなくなってきたことや、大学の授業への準備ができない学生の増加が注目され始めていた。これらの問題に対し、新大学では設立当時からカレッジ制を採用し教員と学生の接触機会を増やしたり、ロンドン大学・市民大学の、講義中心の教授形態を見直し、チュートリアルなどの少人数教育が重んじられた⁴⁴。

オックス・ブリッジにおいてチューターが学生に対して行ってきた「学問的指導＋道徳的指導⁴⁵」は、新大学においても採り入れられた。新大学では、教員と学生の接触機会を増やす努力がなされ、「道徳的チューター」の概念が広く導入されており、大半の教員が道徳的チューターになることが要求され奨励されている。というのも、この教員と学生のより親密な触れ合いにより、教員は学生を個人的に知ることができ、学生も学問的・精神的に困難に陥った場合、そのメッセージを教員に対して早期に出すことができるからである。道徳的チューターは学生の学業の進捗状況に対しても責任をもつというのが一般的である⁴⁶。ただ、道徳的チューターが学問的指導をどのくらい併せ持つか、その程度が大学によって異なっている。

本章では新大学へのチュートリアル伝播過程について明らかにした。新大学への伝播の特徴は、大学設立当初から、政府の奨励によってチュートリアルが主要な教授形態として導入されたことである⁴⁷。また、新大学は国立大学として設立されたため、財政面において比較的ゆとりがあったことも、チュートリアルの維持・普及を促進した一因であると考えられる。

さらに注目すべき点は、新大学では、学問的指導に加え、チューターの道徳的指導という側面が積極的に取り入れられたことである。チューターの道徳的指導という側面は、スクール制を採った新大学においても、カレッジ制を採った新大学においても重視された。カレッジ制（＋学科制）を採った新大学においては、チューターの役割として、学問的指導と道徳的指導が兼ね備えられている。一方でスクール制（＋寄宿舎制）を採った新大学においては、学問的指導を行うチューターには道徳的指導という役割が兼ね備えられていない。しかしそれとは別に道徳的チューターを設けることで、学生の道徳的指導という面を補っている。つまり、ロンドン大学・市民大学と、新大学が異なっている点は、新大学ではカレッジ制を採らなければ抜け落ちてしまうチューターの道徳的指導という側面を、チューターの機能を分化させることで維持しているのに対して、ロンドン大学・市民大学では、学生の規模が大きいこともあり、学問的指導だけを行うというスタイルに変容していることである。ここに、1960年代の社会的背景を考慮して設立された新大学と、19世紀から存在し、体質の変化に時間のかかるロンドン大学・市民大学との違いがみられる。新大学へのチュートリアル伝播がオックス・ブリッジのスタイルを比較的継承したものであった理由は、①新大学の約半数でカレッジ制が採られたため、②カレッジ制を採らなかった新大学においても、チューターの役割を分化して道徳的指導を行ったためであると考えられる。

5. おわりに

本論文では、チュートリアル伝播に注目し歴史的アプローチによる分析を行った。オックス・ブリッジにおけるチュートリアルの歴史的変遷を概観することで、チュートリアルを形成する要素を導き出し、それらの要素のうち、19世紀以降に設立されたイギリスの他大学に継承されたものと、継承されなかったもの、さらには伝播過程で変容したものを明らかにし、その背景を探った。

第2章では、オックス・ブリッジにおいて、現在のチュートリアルの原型が作られた19世紀までの歴史的変遷を概観した。その変遷の過程から、チュートリアルを形成する要素として、③ソクラテス要素が含まれること、④チューターに学問的指導と道徳的指導が兼ね備えられていること、という機能的な特徴を導き出した。これらを、先行研究で述べられている、①学生主体、②少人数教育という形態的な特徴と合わせて、チュートリアルを形成する要素と定義づけた。

第3章と第4章では、オックス・ブリッジで形作られたチュートリアルの原型が、19世紀以降どのようにしてイギリスの他大学に伝播し変容したのか明らかにし、第1章と第2章で定義したチュートリアルを形成する要素が他大学に継承されているか、あるいは変容しているかについて明らかにした。

第3章では、オックス・ブリッジからロンドン大学・市民大学へのチュートリアル伝播について考察した。ロンドン大学・市民大学は、大学設立の際にはチュートリアルを導入しなかったが、その後、外的要因により必要に迫られ導入したことが分かった。しかし、チュートリアルは

中心的な教授形態となりえなかったことも明らかとなった。

第4章では、オックス・ブリッジから新大学へのチュートリアル の伝播について考察した。新大学への伝播の特徴は、チュートリアル が設立当初から主要な教授形態として導入されたことであつた。さらに新大学では、チューターの機能を分化させるなどして、道徳的指導という側面が積極的に導入されていることが明らかとなった。

第2章で導き出した、チュートリアル を形成する4つの要素のうち、伝播の際に、ロンドン大学・市民大学と新大学の両者に受け継がれたものと、一方にだけ受け継がれたものがあった。①学生主体については、両者ともにオックス・ブリッジのチュートリアル を継承していると言える。しかし、②少人数教育に関しては、新大学の文系のスクールでは比較的受け継がれているが、それ以外ではオックス・ブリッジにおけるチュートリアル よりも多人数の学生に対して行われている。また、④チューターが学問的指導と道徳的指導を兼ね備えているという要素は、ロンドン大学・市民大学では継承されておらず、チューターは学問的指導のみを行っている。一方で新大学では、カレッジ制を採った新大学では両指導が兼ね備えられていることが多く、カレッジ制を採らなかった新大学においても、チューターの機能を分化させることで両指導を行っている。つまり、新大学の一部へはオックス・ブリッジのチュートリアル が伝播し、さらに変容していると考えられる。なお、③ソクラテス的要素については、新大学の一部では継承されていることが明らかとなったが、それ以外の大学については明らかにすることができなかったため、教員と学生へのインタビュー調査や、チューターへ配布されるマニュアルなどに着目し理解を深めることを、今後の研究課題としたい。

これら4つのうち、伝播過程を経ても変わらず受け継がれてきたチュートリアル の要素は、①学生主体であるといえる。しかしこれがチュートリアル の本質的な要素であるというためにはさらなる考察が必要であり、これについても今後探究していきたい。

冒頭で述べた現在日本の高等教育が抱える問題は、イギリスにおける新大学設立当時の社会的文脈に類似している。当時、イギリスでは授業への準備ができない学生が急増しており、その背景には、学生数の急増と、教員から学生へのサポートの不十分さがあつた。このような状況は、今日の日本の高等教育にも見られ、学生の求めているものに、教員が十分に対応できていないのが現状である。イギリスでは、学生が個人的な問題を抱えたり、精神的に困難な状況に陥った場合、学生主体のチュートリアル において学問的指導を行っていく中で、そこに内在する道徳的指導が学生へのサポートにつながっている。この点から、現在の日本の高等教育が得られる示唆は大きいと考える。この道徳的指導という側面についても、今後具体的な実践例とともに明らかにしていきたい。

註

¹ 大学憲章は、オックスフォード大学に12世紀、ケンブリッジ大学に13世紀に授与された。

² 安原義仁「イギリスの大学における学士学位の構造と内容」日本高等教育学会編『高等教育研究』第8集、2005年、95～120頁。

³ Sanderson, M. *The Universities in the nineteenth century*. London : Routledge and Kegan Paul, 1975.

⁴ Perkin, J. H. *New universities in the United Kingdom*. Paris : Organisation for Economic

- Co-operation and Development, 1969.
- ⁵ Aldrich, R. *Education for the nation*. London ; New York : Cassell, 1996.
 - ⁶ Negley, H. *The University of London, 1836-1986: an illustrated history*. London: Athlone Press, 1986.
 - ⁷ Jones, R. D. *The Origins of Civic Universities*. London: Routledge, 1988.
 - ⁸ Armytage, W. H. G. *Civic Universities*. New York: Arno Press, 1955.
 - ⁹ ケンブリッジ大学においてはチュートリアルではなくスーパービジョン(supervision)と呼ばれる。しかし先行研究においても、またオックス・ブリッジ以外の大学でもこの教授形態をチュートリアルと呼ぶことが圧倒的に多いため、本論文ではチュートリアルとして扱う。
 - ¹⁰ 本論文ではイングランドを指す。
 - ¹¹ この分類の仕方は、先行研究において多く用いられている。
 - ¹² 安原義仁「近代オックスフォード大学の教育と文化」橋本伸也他著『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001年、202頁。
 - ¹³ Curthoys, M. "Examinations, Liberal Education, and the Tutorial System in Nineteenth-Century Oxford" 広島大学研究会発表資料, 2006, p.20.
 - ¹⁴ Bailey, C. (Revised by Bamborough, J. B.) "The Tutorial System" In *Handbook to the University of Oxford*. Clarendon Press, 1962, p.276.
 - ¹⁵ 角川一彦『十九世紀オックスフォード』上智大学、1999年、22～23頁。
 - ¹⁶ 「カテキズム」(catechism)とは、宗教的な起源を持つ言葉で、教会の教義と関係がある。
 - ¹⁷ Curthoys, M. (2006) *op.cit.*, pp.9-10.
 - ¹⁸ 角川一彦、前掲書、1999年、109～110頁。
 - ¹⁹ 2006年10月9日、Curthoys, M.氏へのメールによる質問への回答より。
 - ²⁰ 角川一彦、前掲書、1999年、15～17頁。
 - ²¹ Curthoys, M. (2006) *op.cit.*, pp.12-13.
 - ²² 2006年10月9日、Curthoys, M.氏へのメールによる質問への回答より。
 - ²³ チューターはソクラテ斯的問答法を駆使し、学生に専門分野をより深く考え学ばせる指導を行ってきた。(2004年9月10日、Mason, D.氏へ行ったインタビューより)
ソクラテ斯的問答法とは、鋭い質問によって議論している相手を自己矛盾に陥らせ、相手に自分の無知を自覚させることにより、真理の探究に導くことである。つまり、対話によって相手の不確実な知識から真正な概念が生まれるのを助けることをいう。(広辞苑)
ソクラテスは、問答者と弟子が1対1で、2～3人の傍観者が議論に加わろうと待ち構えている状況で、直接議論を行うことを前提としている。(Palfreyman, D. *The Oxford Tutorial: 'Thanks, you taught me how to think.'* Oxford: OxCHEPS, 2001, p.54)
ソクラテスは問題の基本に戻って、弟子に遠まわしに質問をし答えさせることで、彼らの混乱や矛盾を導き出したが、現代においてもチューターたちが目指しているのはそれである。彼らは、チュートリアルという教授法は古代の伝統的なギリシアの教育に基礎をおいており、ソクラテ斯的問答法のように、学生とチューターとの対話の中で学んでいくのが一番であると考えている。チューターは、学生に質問をすることで、学生の考え方がそもそも出発点から間違っていたことに気づかせ、学生を行き詰らせるのである。(2004年9月9日、Gray, K.氏へ行ったインタビューより)
 - ²⁴ Bailey, C. (1962) *op.cit.*, p.273.
 - ²⁵ 成田克矢「イギリスの大学改革」大学改革研究会編『世界の大学改革』亜紀書房、1969年、47頁、49頁。
 - ²⁶ Bellot, H. H. *University College, London*. University of London Press, 1929, p.47.
 - ²⁷ Foster, G. C. "Outline of the History of University College" In *University of London, University College Calendar*, Taylor and Francis, 1907, pp.xix-xxviii.
 - ²⁸ Bellot, H. H. (1929) *op.cit.*, p.47, p.79.
 - ²⁹ Berdahl, O. R. *British Universities and the State*. Arno Press, 1959, p.24.

- 30 Bellot, H. H. (1929) *op.cit.*, pp.137-138.
- 31 Foster, G. C. (1907) *op.cit.*, pp.xxvi-xxvii.
- 32 Expansion: the birth of distance learning and the establishment of the 'Teaching University'
(<http://www.london.ac.uk/history.html> 2006/09/25)
- 33 Foster, G. C. (1907) *op.cit.*, p.xxvii.
- 34 Bellot, H. H. (1929) *op.cit.*, p.400, p.414.
- 35 University College, University of London *Calendar*. Taylor and Francis, 1928, p.cxx.
- 36 Origins>About the University|University of Leeds
(<http://www.leeds.ac.uk/about/origins.htm> 2006/10/20)
- 37 第1期に創設された市民大学と大学憲章授与年は以下の通り。マンチェスター大学(1880)、バーミンガム大学(1900)、リバプール大学(1903)、リーズ大学(1904)、シェフィールド大学(1905)、ブリストル大学(1909)。第2期の市民大学については以下の通り。レディング大学(1926)、ノッティンガム大学(1948)、サウサンプトン大学(1952)、ハル大学(1954)、エクセター大学(1955)、レスター大学(1957)。
- 38 University Collegeとは、大学憲章授与以前の、学位授与機能を持たない教育機関を指す。
- 39 Perkin, J. H. (1969) *op.cit.*, p.86.
- 40 沢田徹編『主要国の高等教育－現状と改革の方向－』第一法規、1970年、166頁。
- 41 サセックス大学(1961)、ヨーク大学(1963)、イースト・アングリア大学(1963)、エセックス大学(1964)、ランカスター大学(1964)、ウォーリック大学(1965)、ケント大学(1965)の7つの新大学を指す。(かっこ内は学生を最初に受け入れた年)
- 42 Perkin, J. H. (1969) *op.cit.*, p.17, p.30.
- 43 Ibid., p.83.
- 44 沢田徹編、前掲書、1970年、111頁、239～240頁、310～311頁。
- 45 学生の学業とその進歩過程を見守る学問的指導と、個人的な問題を抱えた場合の道徳的指導の両方を行うことを指す。
- 46 Perkin, J. H. (1969) *op.cit.*, p.205～206.
- 47 Ibid., p.172.

(比較教育政策学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Transition and Transformation of Tutorials in British Higher Education

TAKEKOSHI Chie

Tutorials are one of the core teaching methods in British higher education and are a student-centered small group learning practice. It greatly differs from passive learning. Why did the tutorial system spread to other British universities? What are the unique elements of tutorials? This paper focuses on the transition and transformation of tutorials in British higher education, and attempts to find the inherited and unchanged elements of tutorials during the diffusion from Oxbridge to other universities. The first conclusion is that the unique elements of tutorials are (1) student-centered, (2) small group, (3) pastoral and academic care, and (4) Socratic method. The second conclusion is that, through diffusion, all universities which introduced tutorials inherited the first element. Concerning the second element, the size of groups is slightly bigger at London University and the Civic Universities. Of the third element, London University and the Civic Universities did not inherit both the pastoral and academic care, just the academic aspect of tutorials. However, the New Universities, which tried to introduce the "Oxbridge tutorial" inherited the third element, retaining the pastoral care as well as the academic care, dividing the two on occasion. As regards the fourth element, further research including interviews with tutors and students will be required for deeper consideration.